

## 巻 頭 言

埼玉県立大学 研究開発センター長  
鈴木 玲子

年号が替わり、令和2年3月で研究開発センターの開設から丸4年が過ぎました。この間、新たな取組みに挑戦し続けてきましたが、5年目を迎えるにあたり、センター設立の目的や使命に立ち返り、これまでの活動とその成果について振り返ってみたいと思います。

保健医療福祉学部を標榜する大学として、「我が国の保健医療福祉分野の課題に対し、学際的な観点から地域に根差した研究開発を促進する研究拠点として活動するとともに、広く社会に貢献することを目指す」ことを使命に研究開発センターが誕生しました。以来、これまで「地域包括ケアシステム」に焦点を当てた研究や活動に取り組んできました。プロジェクト研究は埼玉県内を研究フィールドとしてテーマを選定し、住み慣れた地域で子どもや高齢者らが暮らし続けるための課題解決策や新たな専門職間の連携を促進させるための手法の開発などに、自治体と一緒に取り組んできました。また、地域包括ケアに関する最新の動きを学ぶために年1回シンポジウムを開催するとともに、医療専門職や福祉職など専門職の方々に向けたスキルアップ研修も並行して実施し、埼玉県内における地域包括ケアシステムの進展の一助になっているものと自負しています。このほか、国、県や市からの受託事業を引き受け、産官学協働による地域包括ケアシステムの構築支援、糖尿病重症化対策の効果検証、介護保険事業計画策定や高齢者福祉計画策定支援活動も実施しています。このように大学の「知」を活用して自治体および医療や福祉分野の方々と連携して課題に取り組んでいくというセンターの基本姿勢を、この4年間で内外に示すことができたのではないかと考えています。

開設記念講演での講演者からいただいたセンターへの期待のお言葉、そしてセンター設置に尽力をいただいた江利川毅前理事長、三浦宜彦前学長と荒井宏前事務局長からの貴重な助言をもとに動き出し、現在は、地域包括ケアシステムの構築を牽引してきた田中滋理事長とともに、センターの活動の方向性が整理されてきていると感じています。研究開発センターのメンバーと4年間歩んできましたが、研究のための研究に収まらず、社会への還元を意識した研究に挑戦できるように、しかしアカデミズムも意識した研究と取組みにチャレンジしていきたいと思います。

今後とも、皆様からのご支援をどうぞよろしくお願いします。